

# 園長先生の子育てひろば

令和6年5月

園長 堀田 あけみ

子ども達をお願いしていた幼稚園に園長として着任する、という結構な離れ業をやったのけた私ですが、当然、園の状況は同じというわけには行きません。一番の変化は平成26年に建て替えられた園舎ですが、次に大きな変化は共働き世帯の増加でしょう。送り迎えにお母さん以外の方がいらっしゃる割合の増加にそれが表れていると思います。それに応じて朝夕の預かり保育の質量が充実しています。14時の定時のお見送りでも、波がすぐにおさまって、すぐに門を閉じられます。預かり保育が多く、私が保護者だった時代に盛んだった、お母さん同士の「園庭外交」がそれほど行われていないようです。

お母さん同士で仲良くなるのはよいのですが、そして実際に私がここで出会ったママ友さんの中には、多分一生よいお友達でいられる人が何人かいるのですが、それでトラブルになることもあることは、ネットでもやたら取り上げられていますね。ママ友デビュー怖い、とか、友達なんていない、となってしまうのも仕方ない勢いです。でも、今回はお母さん同士の問題はおいておきましょう。それも大切なのは理解しつつ。大人のお付き合いを、子どもの人間関係に影響させる、特にそれを制限してはいけないことはお伝えしておきたいのです。子どもには子どもの人間関係があるので、そこに親が介入するのは、子どもにとってストレスになります。大人は子どもを甘く見てしまうこともありますが、彼らはちゃんと自分達の世界を作っているのです。

我が家の次男は3歳のときに自閉症スペクトラム障害と診断されました。少々遅めなのは、複数の条件が重なった結果です。そのとき年長だった長男は、保育室に入れなくなったり、みんなでする課題を拒否するようになりました。幼児がこういった行動をとるとき、理由の言語化はなされないことが多いです。けれど彼はしました。「俺は、他の男子とは違う」。なんか、どっかで聞いたぞ、と思われる方もいるかもしれません。つまり、「障害のある弟をもっているのは自分だけだ」ということです。本当は全然そんなことはありません。けれど、それは口で言ってもわからない、経験で知ることです。周囲が日常を続けているのに、私たち親子は友達との交流を断って、誰のところにも行かない、誰も来ない。遊びにおいでとの声が、我が家にだけかからない。

このときほど、心理学を仕事にしてよかったと思ったことはありません。子どもの成長には、サポートも必要だけれど、信じて待つことも大切だと知っていたからです。

半年ほど経って、かなり落ち着いてきたころ、ある男の子が言いました。「あけみさん（本名は小原ですが、「小原さん」は夫の呼称で、私に対しては「あけみさん」が親子ともに浸透した呼称でした）、遊びに行っていていい？」。いいと答えたら、「あ、俺も行きたい」「俺も」。お母さん方も「あけみさん、お願いね」「お迎えは5時でいい？」まるで、この半年間がなかったかのように。

彼らは友達の異変に気付いたし、それを見守ることができて、もう大丈夫だと思ったら、すぐに元の関係に戻れる。たたきっこして、お互い謝らなかつたり、困ったことも多いんですが、本能的な関係の持ち方は見事です。大人になるにしたがって、その辺の人間関係修復術が苦手になっていくのは、どうしてでしょう。